

郷愁のアンコール、その軋轢と葛藤

ヌー・ハーイ著、岡田知子訳

『萎れた花・心の花輪』

公益財団法人大同生命国際文化基金 二〇一五年九月

カンボジアといえば、私たち日本人はつい暗い歴史の一面と貧しさを思い浮かべがちである。しかし、そこにはほかの国々と同じように独自の歴史や文化に根差し、人びとの心に潤いを与えてきた多様な文学や芸術が生きつづけてきた。本書は公益財団法人大同生命国際文化基金『アジアの現代文芸』シリーズのうちの一冊として上梓されたものである。このシリーズではアジア諸国のさまざまな優れた文芸作品を発掘し、紹介しようという意欲的な取り組みがなされており、そのおかげで私たちはふだん馴染のないアジアの文学作品を日本語で直に読む恵に浴することができるといえる。カンボジア文学としては、『現代カンボジア短編集』（二〇〇一年 岡田知子訳）、『地獄の一三六六日 ポル・ポト政権下での真実』（二〇〇七年 オム・ソンバット著 岡田知子訳）につづく第三段で、本書にはカンボジアを代表する現代作家ヌー・ハーイによる二篇の作品『萎れた花・心の花輪』がおさめられている。

両作品の背景となる一九三〇年代から一九四〇年代、フランス植民地であったカンボジアは近代化を進める一方で自らの民族アイデンティティに目覚めていく躍動的な時代であった。植民地時代をとおしてのカンボジアの社会情勢研究につ

いては Cambridge: *The Cultivation of a Nation, 1860-1945* (Edwards, Penny 2008) に詳しいが、その中にも当時の若者の心情や社会の雰囲気を示す例として『心の花輪』からの一節が引用されている。著者は一九一六年、両作品の舞台であるバタンバン州で生まれた。今年が生誕百年となる。十六歳でプノンペン的高等教育機関コレージュ・シソワットに入学、一九三九年、リセ・シソワットを卒業した当時のエリートである。二年間法律を学び裁判官を経験したあとの一九四七年、情報省に入省し、政府広報誌「カンボジア」の編集に携わった。このころ同誌に発表した作品が『萎れた花』である。その後外務省に移り、一九五二年、政策局長のころ『心の花輪』を著した。駐インドネシア大使として奉職していた一九七〇年、ロン・ノルによる無血クーデターが起こり親米政権のクメール共和国が誕生するが、著者は残留を命じられ一九七二年に引退するまで勤務することになった。一九七五年、ポル・ポト政権が誕生すると、ロン・ノル時代の高級官僚であり作家でもあった著者は真つ先に粛清の標的とされた。

『萎れた花』はカンボジアを代表する現代文学である。さまざまなメディアで取り上げられ、学校教育カリキュラムが独立近代国家にふさわしい内容に変えられると同時に教科書にも採り入れられた。ポル・ポト時代、その後の社会主義体制下では教材から外されたが、一九九六年には新カリキュラムで再び高校の国語教科書の教材として採用されている。『心の花輪』は一九七二年に発表されるが、内戦中などの理由で『萎れた花』ほど広く読まれていない。作品完成から二十年を経て発表したことについて、著者は『萎れた花』の発表後多くの読者から登

場人物が実在の人物ではないかとの疑念が多く寄せられたため、同じ轍を踏まないよう故意に発表を遅らせたこと述べている。また、従順な主人公女性を若くして死なせたという批判に応えた展開にするなど読者の声を意識した作品といえる。著者はこれらの著作の他に『愛する乙女』（一九五三年）、『リアヴォンとロヴィン』（一九五五年）などの長編小説や短編、詩なども発表している。海外でも評価が高まり二〇〇二年、カリフォルニア州立大学テリー・ヤマダ教授によってヌー・ハイ文学プロロジェクトが立ち上げられ、ヌー・ハイ文学協会が発足した。現在も文学賞、会議、ワークショップ、文学誌出版などの活動が続けられている。

世界遺産アンコール・ワットの陰に隠れてさほど知られてはいないが、カンボジアには歴史的にも優れた文学作品が残され、現代に入ってもポール・ポト時代を除けば多くの作品が発表されつづけている。訳者の岡田知子氏は、現在日本でも数少ないカンボジア文学・文化研究者として活躍されており、この方面でかすかすの成果をあげてこられた。本書におさめられた作品がいかにカンボジアの人々に愛されてきたかにふれたエピソードなども氏の研究の奥行きを物語っており、その学識の深さと向けられた眼差しは作品翻訳と解説部分に存分に活かされている。なおこの書籍は市販されていないため一般書店では購入できないのが残念であるが、ほとんどの公立図書館では手にすることができ、また電子書籍で無償公開されているのでどこでも、だれでもが読むことができることを紹介しておきたい。

第一篇目の「萎れた花」は、豊かな自然に恵まれた著者の故郷への思いを込めた作品である。

汽車が煙をはきながら山の麓や森を突っ切り、水田が広がるカンボジアの原風景の中を疾走していく。まるで新しい時代に向かうカンボジアを象徴するかのようである。向かう先はバタンバン、物語の舞台である。バタンバン地方はカンボジア随一の米どころとして知られ、町はフランス植民地時代の面影が残るカンボジア第二の都市である。訳者の解説によれば、バタンバンを歌った歌謡曲は百曲近くを数え、カンボジアの人々にとっては特に思い入れのある地方のようである。ここで主人公二人の恋は生まれた。ブントウアンは、著者も通った当時のエリート校リセ・シソワットの学生である。この学校は、フランスがカンボジアに作った西洋式高等教育機関でさまざまな人材を輩出した実在の学校である。ブントウアンも近代的知識を身に付けた将来性のある若者の一人であった。一方ヴィテイアヴィーは、古い習慣に批判的な考えをもちながらそこから抜け出せない古典的なカンボジア女性である。お互いを「ポール」、「ヴィルジニー」と呼び合う二人はまさに悲劇的な運命を予感させる。この時代、現代的な自由恋愛は認められず、結婚は親同士の手合わせに従うことが常識であった。若い二人の恋は古い因習によって引き裂かれ、美しい花は萎れて落ちる。彼女は抗うのではなく、悲運に身を任せることになって古い因習に立ち向かおうとする。そのために肉体は消滅するが、彼女の愛は永遠の命を得ることができ、新しい価値意識を人々の心の中に植え付けることに成功するのである。まさに古い価値観の象徴が母親のヌオンである。望まない結婚の苦しみ

のあまりヴィティアヴィーの病状が悪化したにもかからず、彼女が頼ったのはおよそ非科学的な行者たちの呪術であった。仏教戒律こそ忠実に守るが、現世利益志向の強い彼女にとつては、愛よりも富、近代医学よりも民間の伝統的呪術にこそ価値があった。仏教と民間信仰の混然とした同居はカンボジア社会の一面でもあり、彼女が信じた呪術は現在でも根強い人気がある。作品の中には、ヌオンが娘の結婚をお寺の住職に貝葉本を使つて占つてもらふ場面や、ヴィティアヴィーの病氣回復のために呪文を唱える住職、ご託宣をくだす巫女の所作などが細かく描かれている。一方で若いヴィティアヴィーは敬虔な仏教徒として仏に祈るなどカンボジアの庶民の信仰に対する多様な姿勢がうかがえる。この当時カンボジアの仏教界は改革運動に揺れていた。僧侶は仏教経典や戒律に立ち返るように叫ばれ、仏教の本質とはかけ離れた呪術的な儀式や治療行為を排除する動きが盛んであったが、その思想は末端まで浸透しなかつたということであろう。ところでこの物語には悲しい恋に付きまといがちな沈んだ色調はなく、豊かな色あいが感じられる。著者の目は南国の日差しの中の色とりどりの花々や緑の木々のひとつひとつ、小鳥、虫などそこに生きる小さな生き物にまで向けられているのである。ブントウアンが涙しながらヴィティアヴィーの最後の手紙を読み終えたとき、家の外では、風がごうごうと吹き、ときどき夜鳩の鳴き声が響く。亡き恋人の愛を心に刻みつつ、古い価値と決別し、眦を決して新しい時代に一歩を踏み出そうとする一人の若者の姿が浮かび上がる。彼のその思いと眼差しがひしひしと伝わってくるようだ。全編を貫く彩りの鮮やかさは対照的に静かな悲しみが心に広がる。

「心の花輪」は、男女の愛のすれ違いを中心に物語は展開するが、純粹な若者の祖国への思いがもうひとつのモチーフをなしている。

近代国家の領土というものは、歴史の風向きによっていかようにでも変わりうる。そこには悲劇が起き、人類は今でもその苦しみ耐え続けている。七十数年前アジアの片隅で起きた出来事もそのひとつといえる。ティキアブットは近代的教養人であり、故郷を愛し至誠と情熱をもつて生きる前途有望なカンボジアの青年である。彼の運命の人となるチャンタマニーは高等教育を受けた隣国シヤムの女性で、当時としては先進的な平和主義の持ち主であった。彼が作った二篇の詩がチャンタマニーの心をとらえる。本書の中で詩は巧みな散文に訳されているが、原文は韻律詩である。おそらく彼は心に響くような美しい声で詠いあげたことであろう。しかし、国境を越えた二人の愛は歴史の波に翻弄されてゆくことになる。ティキアブットは断腸の思いで学問を諦め役人になる。フランス植民地時代、各州にはフランス人弁務官が「ご主君様」として君臨し、そこに卑屈なカンボジア人州知事が家臣として仕えているという構図が見えてくる。小役人は必要な服も買えないほど安い給料でみじめな生活を強いられていた。加えて賄賂まみれであったことは純粹な彼を失望させるのであるが、ここには登場しない植民地住民の苦しみは想像に余りある。物語にたびたび登場するアンコールワットは、カンボジア人にとって過去の栄光と民族の誇りを象徴する自己アイデンティティの源であった。そのアンコールワットを含むシェムリアップや著者の故郷バタンバ

ンは、十八世紀末以来シャムに帰属していた。一九〇七年のフランス・シャム条約でこれらの土地はカンボジアに返還されるが、第二次世界大戦でフランスがドイツに降伏すると、またしてもタイに割譲されてしまう。アンコールワットの失地は民族意識に目覚めたカンボジア人にとって全人格を失うに等しく、おそらく私たち日本人の想像を超えた絶望的な悲しみであったに違いない。このときの著者の怒りと悲しみ、失地回復への執念はティキアブットの気持ちに重なっている。さらにカンボジアの苦悩は続く。敗戦直前の日本が後ろ盾となつて「独立」を宣言し、まがりなりにもタイとの関係は対等になるが、著者はこの欺瞞的な独立にも鋭い批判の目を向けている。皮肉にもこのまがい物の「独立」がカンボジアに真の独立意識をもたらしたのではないだろうか。一九四六年のフランス・タイ協定でタイに併合されていた領土はカンボジアに返還され、ついに失地回復はなつた。しかし、これはこの国で始まる悲しみの序曲にすぎない。著者は冒頭で語っているように、作品をとおしてカンボジアの若者に愛国心の大切さを伝えようとした。その著者はいえばロン・ノル政権の外務官僚でもあつた。親米の同政権は当時強硬な反共政策を掲げ、北ベトナムと南ベトナム解放民族戦線を敵と見なす一方で、タイとの間では過去の憎しみを乗り越えて友好関係を強固にする政治的要請に迫られていた。本作品の中で著者はティキアブットに、「同じ宗教を信じ、同じ伝統習慣、同じ文明をもつ兄」、「優美さ、麗しさにおいて理想の国」、「タイの言葉は美しい、タイの微笑みは素晴らしい、タイの甘味はおいしい、その所作は柔らかい、なんであれタイからきたものは愛すべき」と語らせ、タイへの親愛の情を

最大限に表している。おそらくこれは著者の本心であつたにちがいない。それにしても作品が二十年もの時をおき、あえてこの時期に発表されたことに政治的な匂いを感じるのには私だけであろうか。ロン・ノルのクーデター後カンボジアは泥沼の内戦に陥つてゆく。その後の悲劇は歴史が示すところである。平和を取り戻した今日でもタイとの間で起きたアンコール時代の遺跡プレアヴィヒアの領有権をめぐる争いは記憶に新しい。国と国との関係は常に微妙なバランスの上に成り立っている。なぜ人間は争うのか。その問に答えることは容易ではない。それでも私たちは頼りない糸を紡ぐように平和への努力を怠ることはできない。この作品は歴史に翻弄される小国の苦悩と平和への強い願い、そしてその糸を紡ぐことの大切さを、心の花輪に託して私たちに伝えてくれているのである。

(調 邦行)